

## 父親の心理学

父親が育児に関わることが以前よりも当たり前になり、親子関係の研究においても父子関係を扱うものが増えてきました。父子関係の最新研究を様々な分野の先生方に紹介いただきます。より良い父親になるためには何を実践すればよいかを考えるきっかけになると幸いです。(後藤和宏)

### ワークライフバランスとは

— ライフステージと夫婦関係から探る

埼玉学園大学 特任教授

尾形和男 (おがた かずお)

Profile—尾形和男

1980年、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。博士(教育学)。愛知教育大学名誉教授。2016年より現職。放送大学非常勤講師を兼任。専門は生涯発達心理学、教育心理学。著書は『父親の心理学』(編著、北大路書房)など。



「父親不在」という現象はイギリスの産業革命に端を発していますが、近年は産業革命当時とは異なる意味で用いられています。

我が国の場合、戦後経済復興のために男性が労働にあたり、世界でも労働時間の長い国として扱われてきています。同時に男女の役割分担意識も強く、そのために男性が家事・育児に関わる時間が少なく、女性を中心となって子育てに従事しているという構図が長く続いてきました。しかし、平成8年以降共働き家庭が専業主婦家庭よりも多くなり、それと並行して、合計特殊出生率の低下、平均寿命の伸び、女性の社会進出の進展、女性の生き方の変化、ジェンダー観の変化など種々の要因が絡み、男性の生き方も変化を余儀なくされているのです。

これは取りも直さず、男性の家事・育児と労働の両立をいかに捉え取り組むのかということに深く関連する問題です。男性の家事・育児は最近の社会状況の変化の中では今までにない踏み込んだ取り組みが求められているといえます。しかし、我が国の6歳未満児を有する男性の家事・育児参画が世界

と比較してどのような現状にあるのか目を通して見ると(内閣府男女共同参画局, 2017)、欧米の先進国と比較して一番短い時間であることが指摘できます。しかし、年々父親の意識が変化し、家事・育児への参画が上昇していることも事実です。また、ファザーリング・ジャパン(FJ)といわれる若い父親の組織が全国にできてからは、目に見える形で父親の家事・育児参画が進んでいます。このような父親の家事・育児への関わりは視点を変わるとワークライフバランス(WLB)の問題そのものであることが指摘できるのです。

WLBは仕事、家庭、余暇時間、近隣への関わりの4領域がバランスよく保たれて、人々の生活が充実して精神的にも健康であり、人としての生きがいを感じている状況を指しています。言ってみれば自己実現ができていく状況です。

しかし、WLBは4領域がどのようなバランスを保っているのがより望ましいのか、ということについては漠然としています。各家庭の仕事の状況が異なるなどの要因があるにしても、4領域のどの領域が重要なものになるのか、各

領域の関連性、或いは相乗効果をもたらすのかなど、構造的に不透明な点が多いと思われます。一方、WLBの在り方はライフステージごとに異なると考えられます。例えば乳幼児期は仕事、子育てに費やす時間とエネルギー、夫婦間のコミュニケーションそして心身の疲労回復の調整が求められます。また、学童期以降は仕事に加え子どもの教育や将来のことについて夫婦による話し合い、子どもと向き合うことも求められます。

それでは、「家庭」「仕事」「余暇時間」「地域」それぞれの関わりは、ライフステージを通してどのような状況がより望ましいのでしょうか。

以上の視点に基づいて、より望ましいWLBの在り方を探索した調査結果の一部を簡潔に紹介します。愛知県、東京都、埼玉県、千葉県に在住の共働き家庭を調査対象としました。調査は協力関係機関などを通して実施しました。

4領域への関わりを父親と母親それぞれに回答してもらい、クラスタ分析(階層法)を実施し、四つの生活状況スタイル(「A:夫婦家庭中心型」「夫婦共に家庭

へ関与が高い)、「B：夫婦全関与型」〈夫婦共に地域活動を中心として全ての領域での関与が高い〉、「C：妻家庭関与中心型」〈妻の家庭関与が高く、それ以外の領域は低い〉、「D：夫婦家庭低関与型」〈夫婦ともに家庭関与をはじめとする全領域の関与が低い〉)に分類しました。そして、図1に示した四つの生活状況スタイルについて、特に夫婦関係の状況を比較検討しました。ここでは家族成員のストレス、家族機能も含めて多変量分散分析を行いました。

夫婦関係は質問紙を集計の上、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い2因子抽出し、それぞれ「相手に対する満足感」「相手への要望」と命名し、各因子の因子得点を求めました。また、分析の結果は表1に示しました。

まず、「相手への満足感」については、妊婦家庭から大学生家庭に至るまで一貫してA,Bの両生活状況スタイルはDよりも有意に高いことが示されています。ま

た、中学生家庭では夫の場合、Aが他の生活状況スタイルよりも有意に高いことも示されていて、夫婦共に家庭生活に軸を置いた生活の仕方に満足感が高いことも示されています。同様に妻の場合、夫と類似した結果が得られているのです。また、全体としてAとBの生活状況は夫婦関係が良好であることも併せて読み取れます。一方、「相手への要望」では夫の場合は中学生家庭でCよりもAとBが高く、妻の場合は児童家庭、中学生家庭、高校生家庭でDよりもAとBが基本的に高いことが示されています。

以上の結果から、夫婦間の満足感各ライフステージにおいて家庭を中心に、仕事、余暇時間、あるいは地域への関わりがある場合に高いことが示されました。家庭生活に軸を置く場合は、子育てや進学のこと、そして家族成員相互のことなど家族全体の理解が深まり、健全な家族機能が形成されることが推測されます。

相手に対する要望については、自分の話を聞いてほしい、自分の考えを受け入れてほしい、家庭や家族への関心をもっと持ってほしい、など自分や家族との関係を維持したいという内容であり、児童家庭から大学生家庭で妻に多く見られています。これは子どもの勉強、進学、将来のことなど夫婦で相談していかなければならない時期にあり、このような内容を含んだ要望とも受け取れます。また、中学生家庭以降に夫婦相互の要望も見られますが、このことは子どもがある程度手を離れ、夫婦の在り方を見直し再成長に向けて模索し始めている状況とも考えられます。

一方、Dの生活状況スタイルについては4領域全てに渡り低く、具体的な家庭像をイメージしにくくなっています。これに関して、児童家庭から高校生家庭にかけて、妻の夫に対する要望がDはA、Bよりも低く、夫婦それぞれがお互いに了承の上、自分のペースで生活しているようにも考えられます。また、今回生活状況スタイル別に職業の内訳を分類していないのでWLBとの関連性は明確ではありません。しかし最近では職業形態も多様化し、フリーランスやテレワークなど労働時間や働き場所など比較的自由的な職業形態が出現しており、このような働き方も含まれているとも考えられます。そこには、今回測定したものの以外の充実した生き方が存在することも考えられるのです。

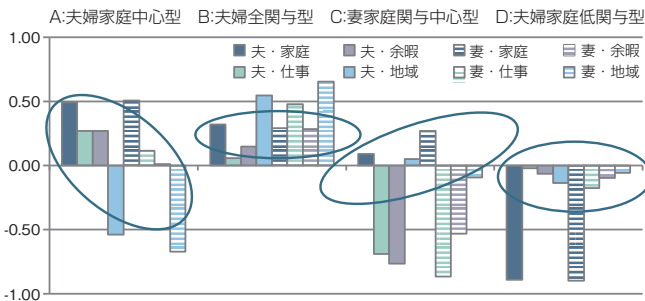


図1 共働き家庭の生活状況

表1 共働き家庭の生活状況とライフステージに基づく夫婦関係

		妊婦家庭 (119 家庭)	乳幼児家庭 (137 家庭)	児童家庭 (214 家庭)	中学生家庭 (363 家庭)	高校生家庭 (184 家庭)	大学生家庭 (195 家庭)
夫	満足感	A,B>D** C>D*	A,B>D** C>D*	A,B>D**	A,B>D** C>D* A>C** A>B*	A,B,C>D**	A,B>D**
	相手への 要望			A,B>C*			
妻	満足感	A,B>D** C>D*	A,B>D*	A,B>D** B>C*	A,B>D** A>C**	A,B,C>D**	A,B,C>D**
	相手への 要望		B>D*	A>D**	A,B>D*		

\* p<.05 \*\* p<.01

## 文 献

内閣府男女共同参画局 (2017) 平成28年社会生活基本調査の結果から：男性の育児・家事関連時間  
尾形和男 (2018) 『家庭と仕事の心理学：子どもの育ちとワーク・ライフ・バランス』 風間書房